

“閃 閃 的 紅 星”

——現代中国における小説とその映画化について——

阿 頼 耶 順 宏

“Sparkling Red Star”

—On a Novel and its Cinematization in the Present-day China—

Junkō ARAYA

1

『閃閃的紅星』（きらめく赤い星）は李心田によって、1961年から1966年のあいだに済南で書かれ、1971年1月に北京でさらに手をくわえられたのち、1972年11月、北京の人民文学出版社から出版された。

この小説は1974年、中国人民解放軍八一映画撮影所で脚色され、カラー劇映画《閃閃的紅星》となって公開された。浜口允子著『北京三里屯第三小学校』（岩波新書）にも次のような記述がある。

中国では個人の家のテレビはまだまだ少ないから、劇場で見る映画や芝居は人々の娯樂の中心であった。春節の時だけでなく年間を通して、工場、地域、学校などでは、組織的によく映画を見に行った。ニュース映画、記録映画も含めれば、学校では毎月最低一回、多いときは三回ないし四回見に行ったと思う。私も努めて見に行ったが、何といても二人の見る数には及ばず、結局は家でテレビに放映されるものを見るが多かった。（中略）七四年から七五年にかけての冬、放映された映画『閃閃的紅星』（かがやく赤い星）は、革命戦争のころのかわいく健気な少年が主人公で、全国的に非常な人気を博したものだ。七五年になると、この主人公の潘冬子は、子供はもちろん大人の間でも学ぶべきすぐれた一つの典型となった。新聞にはさまざまな感想や決意が発表されたし、北京のあちこちの小学校で「学習潘冬子」（潘冬子に学ぼう）活動が展開されたというニュースが伝えられた。二人も潘冬子が好きだった。（157～158ページ）（「二人」とは三里屯第三小学校に学んだ長男と次男。筆者の夫が1972年、日本日中貿易書貿易事務所北京駐在員として北京に赴任し、一家は75年まで北京で生活した。）

映画化され、テレビでも放映されたというこの作品は、現在の中国におけるベスト・セラーズのひとつとなり、350万部という発行部数になっているという。浩然『艷陽天』（人民文学社）がすでに1000万部をこえているといわれるが、これは全3巻の合計であるから、『閃閃的紅星』は『艷陽天』と並んで、多くの人びとに歓迎されている現代中国の代表的な小説であるといえよう。『艷陽天』の主人公蕭長春（シアオ チャンチュン）が青年の英雄的な典型となったと同様に、『閃閃的紅星』の主人公潘冬子（パン トンツ）は少年の英雄的な典型となっている

“閃 閃 の 紅 星”

のである。

この小論でわたしは、この『閃閃の紅星』という作品をとおして、現代中国における文芸の創作と鑑賞のあり方について考えてみたい。

2

この作品は 174 ページ、字数にして 8 万 4 千字の中編であり、巻頭の内容説明では、

本書には紅軍が長征して北上抗日のため江西革命根拠地を離れたのち、その地に残った紅軍戦士の子供潘震山の艱難辛苦の経歴と斗争の生活が描かれている。それは潘震山が党組織と革命大衆の心づかいのもとに教育され、階級闘争の風雨のなかで鍛えられて成長する過程を描き、旧解放区人民の階級敵に対する激しい恨みと、偉大な指導者毛主席に対し、党と革命軍に対する深い階級感情を表現している。作品のことは素朴でよどみなく、青少年の読むのに適している。

とある。以下、そのあらすじを書くことにする。

1934年、わたしは 7 歳だった。ということばで小説は始まる。主人公潘震山（パン チェンシャン）は 幼名を冬子（トンツ）といい、江西省の柳溪という村に生まれた。五歳のとき革命がおこり、地主の胡漢三（フー ハンサン）が紙の帽子をかぶせられ、縄でくくられて引きまわされるのを見る。父親は潘行義（パン シンイー）といい、百姓だったが、隣家に住む 教員の呉修竹（ウー シュウチュ）の導きで農民夜学校へ行き、村に赤衛隊ができると隊長となる。

地主の胡漢三は捕えられていたが逃亡し、赤衛隊は国民党軍との戦いに出勤するが、父は負傷して帰り、手術をうける。

やがて紅軍は根拠地を離れることになり、傷のなおった父は長征に参加するために、手術でとり出した銃弾と、かばんからはぎとった五つの赤い星を冬子にわたして出かける。そのあとで胡漢三は国民党軍とともに村にもどってきて村の様子はかわる。呉修竹はこっそりと村にもどって活動し、冬子の母親も共産黨員となる。胡漢三にねらわれて、冬子と母親は山の根拠地に逃げるが、ひそかに柳溪の村へ工作に出かけた母親は胡漢三の指揮する保安団に捕えられ、木につるされ、下から火をかけられて死ぬ。

山中にこもった赤衛隊は遊撃隊となってたたかうが、冬子は山をおりて宋おじさんの家にかくまわれることになる。十三歳になった冬子は山の遊撃隊に加わろうと、宋おじさんにだまて山にはいるが、遊撃隊は以前の所にいず、帰り道で胡漢三に見つかってしまう。胡漢三は今日本軍の下で村人たちを苦しめていた。胡漢三は冬子をおいかけてかくれ家をつきとめ、冬子はあやうくのがれるが、宋おじさんは捕えられて牢に入れられる。

冬子は 連絡のとれた 呉修竹から、町の米屋（茂源米穀店）にでっちとして 住みこめといわれる。米屋はデブの主人と、やせたおかみさんとその娘、それにばあさんの四人家族で、使用人が六人いて、毎日つまらぬ雑用でこきつかわれる。米屋の主人は米に砂をまぜたり、買いしめをやったりしてあくどくもうけようとする。米をたくさんかくしながら売ろうとしない米屋に貧乏人たちが押しかけ、大騒ぎとなるが、米屋の主人とつながっている警察は、発砲して追いちらす。

ある日この米屋に大事な客が来ることになる。それが母親を殺した地主の胡漢三で、冬子の顔を見て、おまえは潘行義のむすこではないかと問いつめられる。その晩、酒に酔って眠って

いる胡漢三のへやに冬子はしのびこみ、へやに火をつけて米屋をとび出す。

冬子は山をこえ、川をわたって、父親のいるという延安をめざして北へ北へと進む。村人に食べものを乞い、苦勞して旅をつづけるうち、保長の武玉堂（ウー ユイタン）の子供とのけんかがもとで、動けなくなるまでなぐられ、気を失っているところを姚（ヤオ）じいさんに助けられる。この家の息子は共産軍に参加していて、家族は冬子をかくまうが、ここでも国民党の中央軍が村人を苦しめており、冬子は兵隊としてとられそうになる。

冬子はまたここを逃げだし、長江のほとりまでたどりつくが、ここで敵にとらえられ、闇夜に乗じてあやうくのがれて北岸に泳ぎつく。さらに歩きつづけて、遂に国民党軍を追って南下し、交戦中の解放軍と出会う。

1934年から1949年まで15年が過ぎて、冬子はりっぱな青年に成長し解放軍兵士潘震山となる。潘震山は10日間の休暇をもらい、世話になった姚じいさんの家をたずね、また町の米屋にも行ってみる。そして、あのなつかしいふるさと柳溪まで帰ってくる。喜んで迎えてくれた村人たちは、やけどをただけで助かり、その後も悪事をつづけていた地主の胡漢三を追ってたたかっているところであった。冬子はいよいよ胡漢三をとらえ、人民裁判ののち、胡漢三は冬子の母親が焼き殺された木の下で銃殺される。

長く消息のとだえていた父親からも手紙が来ていた。父親は済南で副師団長になっていた。すぐにも会いたい心をおさえ、潘震山は父親に長い手紙を書き、中国全土を解放するたたかいに参加するために、また部隊にもどっていく。

この小説はまた北京外文出版社発行の英文雑誌“Chinese Literature”1972年第9期にも、“Story of a Red Star”として38ページにわたって紹介された。

3

映画化された『閃閃的紅星』は、1975年1月号の《人民画報》（日本版は《中国画報》）に15枚のスチール写真とともに紹介され、表紙は少年冬子を演じた祝新運（チュ シンユン）のかわいい写真で飾られた。また1975年第2期の“Chinese Literature”は映画シナリオ‘Sparkling Red Star’を55ページをつかって掲載したほか、16ページにわたるスチール写真も発表している。

一方、この作品に関する書物がつぎつぎに出版された。まず1975年1月に

《閃閃的紅星》評論集 上海人民出版社

3月には 紅星照我去戦闘 上海人民出版社

4月には 閃閃的紅星——電影文学劇本—— 人民文学出版社

5月には 閃閃的紅星——電影文学劇本和創作經驗筆談—— 広西人民出版社

電影芸術的燦爛新花 人民文学出版社

等であるが、これらの多くはこの作品について新聞や雑誌に発表された評論や感想を集めたものであり、この時期に『閃閃的紅星』をめぐる一大キャンペーンが行われたことがわかる。一つの作品が発表され、それが映画化され、テレビでも放映され、それをめぐって、新聞や雑誌に多数の人が文章を発表し、全国的な運動として展開されていくといったパターンがここにはある。

上記の書物によって、1974年の10月、11月の2か月の間にどういう論議がなされているかを

“閃 閃 的 紅 星”

見てみよう。

- 映画《閃閃の紅星》のわたしに対する教育 黄帥 (10, 9, 《北京日報》)
鋼は火の中で鍛えられ刀は石の上でとがれる 楊政 曉翟 (10, 12, 《解放軍報》)
党の光は万代を照らす 和谷岩 (10, 12, 《解放軍報》)
紅星は英雄を育て光彩は万代を照らす 姜思慎 (10, 12, 《解放軍報》)
ひとりのかわいい小英雄 方鐸 (10, 22, 《人民日報》)
潘冬子に学び革命の小英雄になろう 北京西四北小学紅小兵大隊文芸
評論グループ (10, 23, 《北京日報》)
閃光の芸術形象 都郁 (10, 25, 《文匯報》)
《党の子供》から語る 任大霖 (10, 25, 《文匯報》)
苦心の再創作, 喜ぶべき新収穫 姚青新 (10, 25, 《解放日報》)
冬子の成長過程 杜華章 (第11期《学習と批判》)
きめのこまかく感動的なすばらしい映画 方沢生 (第11期《朝霞》)
冬子を演じ, 冬子に学び, 党のよい子供となる 祝新運 (第11期《紅旗》)
小さい鷹ははばき風雨の中を飛ぶ 双平 (11, 3, 《解放軍報》)
映画音楽創作の新収穫 穆静 (11, 7, 《解放軍報》)
光かがやく小英雄の姿 江鳧生 譚炬華 (11, 11, 《河北日報》)
心こめて毛主席の革命路線をたたえる 四八〇〇部隊 景廷旌 (11, 13, 《解放軍報》)
冬子のような革命の後継者を育てよう 北京市製菓工業公司党委書記 魏鋒
(11, 15, 《人民日報》)
潘冬子——革命の小英雄 杜仲華 (11, 17, 《天津日報》)
無産階級革命の心を抒べよう 伍松 (11, 19, 《文匯報》)
細部にわたる芸術処理の典型を語る 趙志強 (11, 19, 《文匯報》)
映画芸術の輝く新しい花 小櫛 (11, 22, 《人民日報》)
党がわたしにさせることは, なんでもする 北京自動車製造工場労働者評論グループ
(11, 27, 《光明日報》)
“得て復た失う”の歴史教訓 柳万千 (11, 30, 《文匯報》)
無産階級革命激情の賛歌 黄淮 (11, 30, 《文匯報》)

これ以外の新聞、雑誌にも多くの文章が出ていたことは想像に難くない。日本では考えることもできぬ怒濤のごとき激しさ、といったものを感じさせるものがある。以下、こうしたものの中からいくつかをとりあげて、その内容をさぐることとする。

4

この作品の映画化の過程では、実に大きな改編がなされている。これについて10月29日の《解放日報》に掲載された姚青新「苦心の再創作, 喜ぶべき新収穫」をとりあげてみよう。これには「カラー映画《閃閃の紅星》の同名小説に対する改編の成果を語る」という副題がついている。かれはこの文章で映画脚本を作るときにおこなわれた改編には、以下の四つの重点があったという。

- (1) 集中的に英雄人物のために一つの典型的な環境を設ける。

社会主義文芸の根本任務は、現実生活の中にある“矛盾と闘争の典型化”の過程を通じて、無産階級の英雄の典型をつくりだすことにある。小説では、潘冬子の活動範囲は、江西省柳溪の故郷から長江の北におよび、さらに延安へ赴くところまであり、時間も1934年から1949年までで、この間第二次国内革命戦争、抗日戦争、解放戦争、と政治情勢にも大きな変化があった。映画では原作を時間的空間的に圧縮し、潘冬子が茂源米穀店を出て北上し延安に行く途中で遭遇したことをえがいた小説の後半を削除して、故郷の江西革命根拠地柳溪一帯に限定し、期間も1931年の王明をリーダーとする第三次“左”傾機會主義路線の統治した時期から、1935年1月の党の遵義会議が勝利のうちに閉幕する前後の曲折変化の多かった時期までとし、第二次国内革命戦争の時期の江西革命根拠地での政治情勢と闘争、党内の二つの路線の闘争にしばって、そのなかで潘冬子の英雄的な姿を作りあげ、テーマの思想に一つの典型的な環境を提供する点を深めた。

潘冬子は代々、地主の圧迫と搾取を受けた貧困な家庭に育ち、残酷な階級的圧迫がかれに小さいときからこれに反抗する貴い本質を具えることを決定づけた。同時にかれはまた革命的な家庭に育って、小さいときから父母の革命英雄主義の薫陶を受け、強烈な革命への心をいさぐのであり、はげしく曲折した闘争の過程が、かれに勇敢で機敏で、苦しみをおそれず、死をおそれぬ頑強な革命の意志をきたえあげた。潘冬子はこの“典型的な環境の中の典型的人物”のひとりである。

(2) 主要な矛盾闘争をきわだたせ、その発展を全編の中心に貫かせる。

小説では潘冬子の成長過程で、基本的に次の四つの矛盾に対する闘争を展開する。潘冬子と地主の胡漢三との闘争、茂源米穀店の主人との闘争、北上して延安に赴く途中での保長武玉堂との闘争、中央軍との闘争である。作者は胡漢三との闘争をストーリーをつらぬく一つの中心としようとしてはいるが、ほかの闘争との間に有機的なつながりを欠き、一つにまとまっていない。映画に改編するときには、第三、第四の闘争を削除することによって、地主の胡漢三との闘争をきわだたせた。そのため、映画では最初のところに、潘冬子が、祖父を死に追いやった罪行を訴える場面と、胡漢三が潘冬子を吊るして打つ場面を新しく設けて、主要矛盾の発端をただちにくりひろげた。

小説では茂源米穀店でうちの潘冬子はずかしめを受けることと、主人が買いだめで暴利をはかる描写が比較的多く、これでは胡漢三との闘争という中心テーマから離れるので、映画化の際には、茂源米穀店は買いだめで暴利をはかるだけでなく、胡漢三が山狩りをするための軍隊の食糧を専門にひきうけており、党組織がそこに潘冬子をおくるのは、身をかくすためではなくて、遊撃隊にかわってその耳目となり、胡漢三をやっつけるチャンスをねらう役目とした。こうして米穀店での潘冬子の一挙一動は、胡漢三とのたたかいと緊密に結びつけられ、映画の中心テーマをきわだたせ、潘冬子の典型的な英雄の姿を作りあげることに成功した。

(3) 主題を深め、党の指導をきわだたせることに努める。

小説の中では党の指導の姿は、教員を公のしごととしている地下黨員呉修竹を代表とする。小説では潘冬子の成長過程で党組織のかれに対する教育とその影響に注意してはいるが、潘冬子の個人の自発的な闘争の過程を描写することが多すぎて、主題を深めることが不足し、そのために潘冬子の成長過程での党の指導の姿がやや弱い。映画では、父母、宋おじさん、遊撃隊兵士等の人だけでなく、いろいろの側面から党と人民大衆の冬子に対する教育と育成をつよめ、

“閃・閃・的・紅・星”

とりわけ毛主席の革命路線を執行する紅軍呉おじさんの姿を集中的に作りあげて、党の潘冬子に対する教育と育成をつよめた。

映画では党の指導をきわだたせるときに、正確な政治思想路線で潘冬子の指導をつよめることに注意した。小説では負傷した父親が弾丸をとりだしたとき、父親は弾丸と弾丸についた血（この点を小説では何度も強調している）を忘れるな、と冬子にいうが、映画では紅軍の呉おじさんがその弾丸をとおして冬子に思想政治教育をおこない、冬子が個人が仇をうつという狭い観念から、国民党とのたたかいに血を流すことと、共産政権を守り、全人類を解放することの間の関係と道理を明らかにさせる。

映画ではまた、潘冬子の成長過程での指導をつよめることに注意した。紅軍の主力が根拠地を撤退して長征にうつってから、革命は低調となり、当時の冬子は毎晩紅軍が帰ってくことを夢にみ、毎日勝利がやってくるのを待ちのぞむという、一種の消極的な“待つ”要素をもっている。呉おじさんは、敵は闘争を経てはじめてやっつけることができ、革命の勝利はひとりひとりの革命戦士がたたかってはじめてやってくるものだとして冬子が認識するのを助けるように、時に応じて指導をするのである。

映画ではさらに、党組織が意識的に潘冬子を激しい闘争の中に送りこんで育てるという点をつよめた。映画の中でのかれの一連の活動は、すべて党組織が意識的に“大衆闘争という学校のなかでもまれもまれて、知識をふやす”鍛錬をさせるのであり、潘冬子の成長の源泉は“党がかれを成長させた”という主題をかかげることに成功し、小説のなかでの成長過程にある一種の自発的傾向を克服している。

(4) 時事にふれて、現実の政治闘争のためにつくす。

映画では強烈に時事にふれることによって、政治思想性は小説よりも大きく飛躍した。映画のなかで、冬子を茂源米穀店にでっちとして住みこませ、情報を集めさせる計画に対して、かれはまだ小さいからと宋おじさんがいうと、呉おじさんは、このようにいう。

「あんたのようなとしよりから見ると、あの子はいつも小さい、小さいのだろうが、‘鋼は火の中できたえられ、刀は石の上でとがれる’という。あの子は大体兒童団をやっているのだろう、それに、あんたが助けてやりなさいよ！」

“年が若い”“未熟だ”“若い竹では重い荷物がかつげない”などといって、若い人を自分の羽の下に入れておくことはできない。無産階級革命の歴史的使命は、一二代の人で完成できるものではない。無産階級革命事業のあとつぎを養成することは、過去、現在、将来にわたる長い歴史の時期の中で、戦略的な意義をもつ仕事である。あとつぎは早くから、小さいときから激しい闘争のなかで鍛錬して成長させねばならない。

姚青新はこのように述べたあと、映画《閃閃的紅星》が小説の改編に対してかちとったこれらの成果は決して偶然ではなく、それは江青同志の指導する無産階級文芸革命10年の経験からの必然的な産物であり、革命的映画工作者が革命模範劇の“三突出”という創作経験の実践に努力した喜ぶべき成果である、という。そして、このように映画芸術の特長を発揮して、再創作をおこなう最終目的は、無産階級の英雄の姿を作りあげることにあるのだ、というのである。

以上の要約で、現代中国では小説の映画化の際に、どうした観点からその改編が行なわれているかを知ることができよう。このなかにある根本理念が、毛沢東の「延安の文芸座談会での講話」（1942年5月）における基本的な考え方に基づいていることは明瞭である。毛沢東はいっ

ている——

「革命的文芸は、實際生活にもとづいて、種々さまざまな人物を創造し、大衆が歴史を前に推し進めるのを助けるべきである。たとえば、一方では人々が飢え、凍え、圧迫されているのに、一方では人間が人間を搾取し、人間が人間を圧迫している、といった事実は到るところに存在しており、人々は今さら珍しく感じない。そこで文芸が、このような日常の現象を集約し、その中の矛盾と闘争とを典型化し、文学作品あるいは芸術作品に仕上げるならば、それは人民大衆を呼び醒まし、奮起させることができ、人民大衆を動かして団結と闘争に向かわせ、自分の環境の改造を実行させることができるのである。」⁴⁾

5

このようにして創作される文芸作品は、闘争に明け暮れる激しくきびしい生活を描き、ロマンチックな人間感情を無視した、革命教育のための蒸溜水のようなものになってしまうおそれはないであろうか。こうした点について、中国人民解放軍八一映画撮影所《閃閃的紅星》創作グループ・制作グループの「銀幕上で無産階級のために奮争を——映画《閃閃的紅星》のいくつかの創作体験——」⁵⁾という文章のなかから、抜きだしてみよう。

資産階級と修正主義者はわれわれ無産階級を“感情をもたない”，“抒情ができない”と攻撃する。われわれは文芸作品を通じて有力な反撃をしなければならぬ。無産階級の戦闘生活があるところには、どこにでも無産階級の革命の激情がある。

革命のために抒情し、革命の情を抒べるためには、まず創作する人に無産階級の英雄人物に対する深い感情と正確な認識をもつことが要求される。冬子の経歴の中には、父親との遠い別れがあり、母親の犠牲があるが、もちろん修正主義の観点でいわゆる“生別”と“死別”を誇張することはできないが、かといってまたこうした誤りを犯すのをおそれて“退きて三舎を避く”（おそれてひきさがる）こともできない。われわれは革命の挫折、失敗と闘争の艱難辛苦、さらには流血の犠牲までも描写することを回避しないが、かならず革命の英雄主義と革命の樂觀主義をきわだたせ、すすんで革命戦士の不屈の激情と広い胸のうちを抒べあらわさねばならない。

身内の人が遠くへ行こうとする別れのと看、話すのは入党のこと、闘争のことや遠大な革命理想であり、遊撃隊が風雨にさらされ野営するとき、一碗の野菜のおつゆ、一枚の綿入れのオーバー、大衆の心をいっぱいにくめた塩を入れた竹筒が、あたたかい階級の友愛をあふれさせるのであり、誤った路線が革命戦士を白色テロの恐怖におとし入れても、“峯には一面赤い花”のうた声がかれらに革命はかならず勝つという樂觀的な感情を訴えるのであり、母親が勇敢に犠牲となり、ひとりの戦士がたおれていても、そのもえさかる火はつづいて紅旗にかわり、無数の新しい戦士が革命の隊列にはいっていく。ここで、確實に革命事業発展の主流と英雄人物の思想の本質をつかみさえすれば、大胆に革命の感情を抒べあらわすことができるのである。

さらにこの文章では、映画芸術の特性を生かすことによって、映画の抒情にことばは多く使う必要のないことなども述べ、色彩の点でもこの映画は緑色を基調としたが、緑色が江南の風光にあい、人物の闘争生活の環境の特徴にあうということのほか、生き生きとした前進の精神

“閃 閃 的 紅 星”

と生活力にみちあふれた環境の気分をあらわそうとした、といっている。青々とした山や緑の竹は、日々に成長するたたかう少年と活気あふれる革命事業をきわだたせるものであり、その中に革命を象徴し、党を象徴する赤い色をつかうことによって、“万緑叢中一点の紅”の効果を求めた、という。各場面での色彩処理とその効果、さらにはこれに音楽を加えて“革命の政治内容と可能なかぎりの美しい芸術形式との統一”に到達するよう努力したことを書いた文章は、映画化に際しての激しい意気どみを感じさせる。

6

《閃閃的紅星》についてのさまざまな評論を通して、特徴的なことは、それらがほとんどすべて映画《閃閃的紅星》についての評論であり、原作の小説に対する評論が見られないことである。これはどうしたことであろうか。もちろん、映画化の過程で前述のごとき大きな改編が行われており、それはむしろ、原作をもとにした「再創作」といえるものであるが、その改編の理由は主として映画としての特色を出すため、あるいは映画化の上での制約があるためとも言えるものであって、原作そのものの欠点はほとんどとりあげられていない。現代の中国においては、ある小説が出版されるということは、文芸工作指導者の賛同を経た上のことであり、批判すべき点のないことを認めた上のことであるからであろうか。さらに特徴的なことは、映画《閃閃的紅星》についての評論のなかで、これに対して、あるいは部分的にさえも批判的なことばがみられず、すべてがこの作品の成功をほめたたえていることである。それは「感動的なすばらしい映画」であり、「喜ぶべき新収穫」であり、「光かがやく小英雄」をたたえるものばかりである。そして人びとはこの映画から学び、「冬子のような革命の後継者を育てよう」と呼びかける。これはもはや「評論」ではなく、単なる決意表明でしかない。こうした「評論」のあり方に疑問を感じ、とまどいを覚えることは、現代中国への理解がなく、階級的自覚がなく、資産階級的なものの見方に毒されていると批判されることになるのであろうか。

1975年3月に上海人民出版社から出版された「紅星照我去戰鬥」（紅い星はわたしがたたかに行くのを照らす）という書物は、「従《閃閃的紅星》中学習些什么」（《きらめく赤い星》からなにを学ぶか）という副題があり、映画の中のいくつかのきらめくことば、たとえば“ぼくは党の子供だ”“なにももたずにどうして毛主席に会いに行けよう”“ここでもやはり戦争しているのだ”“苦しくても、ぼくは恐れない”などの十八の題目について、いろいろの人が書いた文章を集めたものである。この書物の「内容提要」には、はっきりと、「これは青年の思想教育の読物である。」とある。筆者（代序を含めて19人）については説明がないが、文章からみてどれも若い人たちであることはまちがいない。いまそれらの中からいくつかを部分的にとりあげてみる。

われわれ革命青年は高度の階級闘争と路線闘争の自覚をもつ革命青年にならねばならず、さらに冬子のように常に鍛錬を強化し、自分から革命の強烈な要求をもたねばならない。このような自分からの革命の要求は、冬子のことばを借りていえば、“一生懸命に大きくなる”ということである。冬子はまさにこのような貴い自覚的な革命精神をもっていたからこそ、かれの成長の速度はこのように迅速であったのであり、“細仔嫩崽”（よわよわしい子供）の子供がきわまりない知恵と力を発揮し、普通の人々が想像もできぬ英雄の業績を成しとげたのである。（代序）

“閃 閃 的 紅 星”

曉音)

冬子を見よ、かれが明確に自分は党の子供であると認識したとき、かれは喜んで個人のすべてを革命のしごとの中に溶かしこんだのである。突然、敵に包囲された危急の際にも、かれは自分のことを考えず、恐れずに困難に立ちむかい、顔色もかえずおちついて、母親に“ぼくは党の子供だ！”といい、きっぱりとあとに残ることを要求する。米屋で、冬子は胡漢三と生きるか死ぬかのきわどい対決のとき、かれは危険に臨んでおそれず、党にむかって宣誓する。

“ぼくは党の子供だ、児童団員だ、決して党に恥をかかせてはならない！”(「ぼくは党の子供だ」徐金海)

ひとりの無産階級革命者として、しっかりと“おぼえておく”べきことはなにか？《きらめく赤い星》はわれわれにはっきりと回答してくれた。映画のはじめのとき、播行義は地主の鞭と縄から放たれてきたばかりの冬子をだきしめ、深い愛情をこめていう、“坊や、おぼえておけ、毛主席の軍隊がおまえを救ってくれたんだぞ！”映画がおわろうとするとき、播行義はすでに紅軍戦士に成長した冬子をだきながら、激しく感動していう、“おまえ、おぼえておけ、党がおまえを大きくしてくれたのだ！”二度ともいうことばは“おぼえておけ”である。ちがう場合、ちがう情景、ちがう年月だが、いうことは一つのことである。革命者はしっかりと党のことをおぼえておき、しっかりと党の育成をおぼえておき、しっかりと毛主席の恩情をおぼえておかなければならない。(「おぼえておけ、党がおまえを大きくしてくれたのだ」薛梁⁸⁾)

7

このように青年たちは、この映画に感動し、激励されて、冬子のような革命の英雄に学び、りっぱな革命の後継者になることを誓う。しかし、ここで注意したいことは、これらの文章のなかに、いわゆる“おくれた青年”“革命の落伍者”に対する警めのことばが、予想外に多く出てくることである。解放後25年を過ぎ、党の教育を受け、党が育てあげた青年たちで、党の期待どおりの革命の後継者となることができない者が出てきているからである。

しかし、われわれの現実生活の中には、こんな同志もいる。生活条件がちょっと悪く、しごとがちょっと苦しいと、すぐに苦しいと叫び疲れたと叫ぶ。かれらからみると、生活も仕事もいちばんいいのはのんびりしていて気楽なことである。このような精神状態と“苦しくても、ぼくはおそれない”という革命の戦闘精神とはなんと鮮明な対照をなすことであらう！(「苦しくてもぼくはおそれない！」石俊开⁹⁾)

現実生活の中には少数のひよこ式の人物がいるのではないか？かれらはあるいは快適で安逸の生活を追求し、あるいは“俗世間をはなれた桃源境”式の世界に行こうとし、あるいは“まるまる肥えた子供のいる小さい家庭”をなつかしむ。かれらは平和で静かなことを渴望し、波風をおそれ、顔をあげて誰かが来て養ってくれるのを待つばかりで、自分から苦しんで奮闘しようとしない。(「鷹と鶏の連想」叶大¹⁰⁾)

こういうことをいう人がいる、“黨員であれば、党の観念をもつべきだけれども、ぼくはべ

つに党员ではないんだし……”言外の意味は、党员でなければ党の観念をもつ必要はないということである。このような言いかたは正しいだろうか？(「赤い星を心につけた」徐憲¹¹⁾ 鑑)

“党の子供になることは光栄なことだが、でもこんなに要求が高くては、とてもむずかしいよ。”こんなことをいう人がある。実際のところ党のよい子供になることは容易なことではなく、われわれが適切な行動をしていく必要がある。しかしわれわれが常に党の観念を強化し、党のことをきき、党とともに歩んで、たえず世界観を改造しさえすれば、これはなしうることである。冬子にできたことが、どうしてわれわれにできないことがあろう。(「ぼくは党の子供だ」¹²⁾ 鳴金海)

ある青年は学習するときは三日坊主、三大革命闘争に参加しても苦難をおそれ、科学文化の学習もいかげんで、かれらは“がんばる”ことを願わず、あるいは“がんばる”ことをおそれ、その結果はまるで“よばよばの牛がぼろ車をひっぱる”で、ほかの人のほるかうしろにおくれてしまう。(「“がんばって大きくなる”を語る」金一¹³⁾ 曹)

戦争で多くの人が殺され、革命のために多くの人が犠牲となって、新中国は建設された。そして現在の中国の青少年は「戦争を知らない子どもたち」である。かれらは昔のひどいくらしも、革命の苦しみも知らない。ともすれば安易な生活をのぞみ、苦しみを避けようとする傾向があるのであろう。さらに毛沢東路線に反対する勢力との闘争が依然として続けられている国内事情もある。《閃閃の紅星》が公開されたあと、われわれにとっては異常と思われるほどの熱狂的なキャンペーンがおこなわれる必要性もこうしたところにあるのではないか「毫不利己、専門利人」(自分の利益は少しも考えず、ひたすら人のことを考える)、「为人民服务」(人びとのために尽くす)——エゴイズムを克服してこの崇高な理想に到達することは、しかし容易なことではない。中国の文芸は、反革命の復活とたたかい、修正主義路線とたたかうこの一筋の道をこれからも歩みつけて行くことであろう。(1976, 9, 9)

注

- 1) 「中国語」1976年8月号, 38ページ。
- 2) 香坂順一『北京大学二年』龍溪書舎, 1976年3月, 299ページ。
- 3) 「精心的再創作, 可喜的新收穫——試探彩色影片《閃閃的紅星》对同名小説的改編成就」(原載1974年10月25日《解放日報》, 轉載《閃閃的紅星》广西人民出版社1975年5月第1版, 172~183ページ。)
- 4) 「在延安文芸座談会上的講話」人民出版社版《毛沢東選集》第3巻818ページ, 訳は竹内好『文芸講話』岩波文庫32ページによる。
- 5) 「在銀幕上為無産階級爭光——影片《閃閃的紅星》的一些創作体会」八一電影制片廠《閃閃的紅星》創作組, 摄制組(原載《紅旗》1974年第12期, 本文にあげた人民文学出版社版, 广西人民出版社版, および上海人民出版社版評論集のいずれにも轉載されている。
- 6) 「紅星照我去戰闘」(《紅星照我去戰闘》上海人民出版社1975年3月, 5ページ。)
- 7) 「我是党的孩子」(同, 11ページ)
- 8) 「記注, 是党把你拉扯大的」(同, 21ページ)
- 9) 「苦, 可我不怕!」(同, 41~42ページ)
- 10) 「鷹和鷄的联想」(同, 46ページ)
- 11) 「把“紅星載到了心頭上!”」(同, 14ページ)
- 12) 「我是党的孩子」(同, 11ページ)
- 13) 「談“使勁ル長”」(同, 36ページ)